2 回目の「院生歓迎会」

新しく入学した院生の歓迎会が 4 月 14 日（土）の夕方に生協食堂で行われた。昨年の第 1 回の歓迎会を企画した院生の多くが修了して開催が危ぶまれたが、M2 の社会人院生の奮闘により、なんとか開催にこぎつけられた。

大学院の「苦情処理係」にとって、昨年につづいて継続して開催でき、ほっとしている。こうした歓迎会により、早い段階で院生間や教員・院生の交流ができると、「苦情」の件数も大幅に削減できたからである。

歓迎会には M1 を中心に 20 数名の院生と 6 名の教員が参加して、「盛況」かつ和やかな会となった。これも社会人院生の良い「幹事」のお陰だ。研究科長の挨拶につづき、全員がスピーチを行った。さすがに社会人院生のスピーチはどれも「味」があり、入学の動機や研究への関心などを聞くことができた。社会人院生の旺盛な勉学意欲には、あらためて感心させられた。これは土曜日開講の私の「地方財政研究」の講義でもひしひしと感じている。

大学院人間文化研究科は設立から 7 年余り経った。研究科の特色は、なんといっても社会人と留学生が多いことだ。社会人といっても、じつに多様である。現職の教員や自治体職員、自営業や NPO などで働く人、さらには退職した人などである。この歓迎会でも紹介されたが、数名の社会人院生が昨年度に「研究職」に就職が決まった。研究科長のときに研究科の位置づけをめぐって議論があったが、社会人の多様な研究ニーズに応えていくとともに、困難ながらも研究者も養成していくことを方向に掲げた。それに向けて一歩「前進」できたことは嬉しいかぎりだ。

（２００７年５月６日　記）